

平成22年 3 月 19 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006 ～ 2009

課題番号：18520220

研究課題名（和文）：グリム童話における「文化的変位」に関する研究

研究課題名（英文）：Research on Cultural Displacement in the Fairytales of the Brothers Grimm

研究代表者

梅内 幸信 (UMENAI YUKINOBU)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：00145450

研究成果の概要（和文）：グリム童話のペロー童話・バジール童話との比較・分析，さらには日本昔話・古典落語との比較・分析を通じて，1つの物語が，その伝播に際して民族ないし国々のもつ文化的変位によって変化を被るが，その核心は不変のものであり，物語の精神によって人間と共に永遠に存続するものである。「1つの童話が異国に伝播される時，その本質的部分は不変のものであるが，その童話の文化的環境は，12の文化的変位によって異国の伝統文化・習慣へと置き換えられる。」

研究成果の概要（英文）：The following results were achieved by comparison and analysis of fairytales by the Brothers Grimm, and with those by Ch. Perrault and G. Basile, and further with the Japanese classic rakugo. The diffusion of stories can be changed due to the cultural displacement of different races even though the core of the stories, namely their essence, will remain unchanged as long as man is around to tell them. But their details can be changed into other traditions and customs through the 12 cultural displacement.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度			
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：文化的変位，グリム童話，ペロー童話，バジール童話，日本古典落語，精神分析，深層心理学，ファンタジー文学。

1. 研究開始当初の背景

グリム童話は，その魔法と不思議なものによって読者に娯楽を提供している。それと同

時に，読者に人類ないし民族の智慧を提供している。グリム童話において，主として扱われるテーマは，父親と息子，母親と娘，父親

と娘、母親と息子などの家庭内の人間関係であり、ペルソナとシャドウ、アニメとアニムス、老賢人とグレート・マザーなどの内的諸力の戦いである。前者の問題を分析するのに有効な方法がフロイトの精神分析理論であり、後者の問題を分析するのに有効な方法がユングの元型理論である。このように読者は、グリム童話を読んで楽しむとともに、人間関係と自己の内面に関する智恵を学ぶのである。いうまでもなく、この読書行為を通じて、善悪の判断に関する基本的知識も身に付けることとなる。この意味において、19世紀初頭出版されたグリム童話は、決して「幼稚なもの・根も葉もないもの」、否定的価値をもつものではない。それどころか、家庭と子どもの成長に大きな影響を与える。

18世紀末から19世紀初頭にかけて、フランス革命・ナポレオン戦争・神聖ローマ帝国の没落という一連の歴史的イベントによって、旧制度の崩壊が生じた。これによって、旧来の価値観・歴史観・世界観が変貌を遂げ、世界把握のための諸範疇が無効となり、新たな諸範疇が求められた。この激動の時代にあつて、時代の新たなヴィジョンを提出するものとしてファンタジーの力が文学の分野において歓迎されたのであった。このファンタジーの力は、人間にとって想像力よりも根源的な創造力である。それは、人間の無意識から立ち昇る精神的エネルギーを形象化する力であり、未知のビジョンを導き出す力である。このファンタジーの力は、世界のロマン主義文学の指導的役割を果たしたドイツ・ロマン派の文学理論において、夢の理論・音楽的要素・童話の形式の強調として具体化された。この関連において、ともすれば否定的に見なされがちな「童話とファンタジー」の復権が図られるべきである。

ドイツ・ロマン派の時代にグリム兄弟によって収集・編纂され、出版された『グリム童話』(初版1812年、1815年)は、その後「童話」というジャンルを生み出した。最近グリム童話は、日本において新たなブームを引き起こし、これとともにその研究も盛んになってきている。しかしながら、明治以来(1887「明治20」年、管了法、11話を翻訳)の翻訳の歴史をもつグリム童話も、長期間にわたって日本人に愛読され、親しまれてきたわりには、未だもって誤解されている部分が多い。

例えば、「本当は恐ろしいグリム童話」といった、安易に人口に膾炙した書物である。他方、研究の方も、グリム童話のブームによって、最近ますます盛んになってきたが、多面的なグリム童話の影響力を解明するには未だ不十分である。

グリム童話の研究史を概観すれば、田中梅吉(ゲーテとグリム、「ゲーテ年鑑」9・10巻、1940・1942年)、高橋健二(グリム兄弟、1968年)、小澤俊夫(グリム童話の誕生、1992年)といった研究が存在する。これらは、大半がグリム兄弟の伝記ないしグリム童話の成立史に関する研究である。かろうじて最後の小澤がグリム童話の個別研究に道を切り拓いたといえる。むろん、地味ではあるが竹原威滋の「類話の比較研究」、中山淳子の「グリム童話翻訳史の研究」、野口芳子の「ジェンダーからの魔女研究」、大野寿子の「グリム童話における森のモチーフ研究」、そして、本申請者の「グリム童話の深層心理学的研究」などが存在する。とはいえ、多角的なグリム童話の研究は、ようやく今その本格的な研究の端緒についたばかりである。気候条件も地理的条件も、さらには歴史・文化も違い、そのうえ人種も違うドイツと日本において、似たような童話が成立するということは、非常に興味深い事実である。この事実直面し、言語学に見られる系統樹に倣って、ドイツと日本に存在する類話を初めとし、世界各地に散在している様々な類話を、唯一の童話に還元しようとするならば、それは、やや無謀な試みという印象を免れないであろう。それらの類話の中には、確かに不変的要因、すなわち人間の普遍的特徴が認められる。それゆえ、その普遍的特徴は、人類の精神的共通基盤であるところの集合的無意識から生じているという解釈も可能となるであろう。この普遍的特徴を確定することが、緊急の課題となっている。

2. 研究の目的

「グリム童話」は、世界各国の言葉に翻訳され、現在では聖書に次いで広く普及している。「その魅力の源を突き止め、グリム童話の普遍的核心を抽出すると同時に、愛読者界での誤解を正すこと」を本研究の目的とする。

本申請者は、これまでの「グリム童話の深層心理学的研究」(童話を読み解く、1999年)を踏まえ、最近の研究成果である「グリム童話2話における文化的変位について——『死神の名付け親』(KHM44)と『歌う骨』(KHM28)——」(鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第62号)に基づいて、「グリム童話の普遍的核心を抽出すること」を本研究の目的とする。

3. 研究の方法

第1段階：18年度の研究課題と方法

グリム童話の類話が日本において、2組見出される。

(1) 日本古典落語『死神』は、『死神の名づけ親』(KHM44)の類話である。しかし、両者を比較・分析すると、次の5つ差異が見出される。

- 1) 神と悪魔を登場させていない。(宗教的要素)
- 2) 死神は、「名付け親」ではなく、「相談相手」の役割を果たしている。(人物関係)
- 3) 主人公は、「薬草」ではなく、「呪文」を用いる。(解決手段)
- 4) 最初の病人は、「王」から「お店のお嬢さん」に変えられている。2番目の病人は、「姫」から「江戸でも指折りの大家」に変えられている。(登場人物の職業)
- 5) 謝礼は、「姫の婿となり、王位を継承すること」から「3千両」に変えられている。(謝礼・報酬)

(2) 日本昔話『歌い骸骨』は、『歌う骨』(KHM28)の類話である。しかし、両者を比較・分析すると、次のそれぞれ4つの差異が見出される。

- 1) 『唄い骸骨』: 1. 二人は友人関係, 2. 骸骨は自力で復讐する, 3. 髑髏, 4. 悪人は賭けに負けて首を切り落とされ、その後骸骨が真実を明らかにする。
- 2) 『歌う骨』: 1. 二人は兄弟(人物関係), 2. 小人が弟を助ける(解決方法), 3. 小さな骨(解決手段), 4. 骨が歌うことによって真実が明かされ、悪人は溺死刑に処せられる(処罰の方法)。

グリム童話と日本の類話を比較・分析した結果、次のような注目すべき「文化的変位」が判明した。

「1つの童話が異国に伝播される時、その童話の文化的環境は、1. 宗教的要素, 2. 人物関係, 3. 解決手段, 4. 解決方法, 5. 登場人物の職業, 6. 謝礼・報酬, 7. 処罰の方法の点において、異国の伝統文化・習慣へと置き換えられる。」

しかしながら、その童話の本質的モチーフは、ヴィルヘルム・グリムの場合のように、特定の象徴学によって突然変異を被らない限り、異国においても不変のまま伝播されると考えられる。それこそが、童話の命であり、意識の中で言語によって形象化された人類の集合的無意識であると言えるのである。

第2段階：19年度の研究課題と方法

これら7つの文化的変位が普遍的妥当性をもつかを、ペローの童話とグリム童話とを比較・分析する(例えば、『眠りの森の王女』と『いばら姫』(KHM50), 『赤ずきん』と『赤ずきん』(KHM26), 『サンドリヨン』と『灰かぶり』(KHM21)である。)ここで、第1段階で用いたのと同様の方法を用いる。

第3段階：20年度の研究課題と方法

バジーレの童話とグリム童話とを比較・分析する(例えば、『ペトロシネッタ』と『ラプンツェル』(KHM50), 『日と月とタリリア』と『いばら姫』(KHM50), 『手なし娘』と『手なし娘』(KHM31), である。)『手なし娘』に関しては、ドイツ・イタリア・日本の童話が比較可能となる。この分析からは、有意義な成果が期待される。ここでも、第1段階で用いたのと同様の方法を用いる。

第4段階：21年度の研究課題と方法

第1段階で得られた文化的変位を、第2段階・第3段階での吟味を経て、グリム童話に関する「普遍妥当的変位」を確定する。さらに、この普遍妥当的変位を、アメリカの文化と比較して吟味する。

4. 研究成果

申請時に提出した計画案に従い、4年間にわたって「グリム童話における「文化的変位」に関する研究」を遂行し、ほぼ所期の目的を達成し、全442ページの報告書を作成した。

グリム童話のペロー童話・バジーレ童話との比較・分析、さらには日本昔話・古典落語との比較・分析を通じて、1つの物語が、その伝播に際して民族ないし国々のもつ文化的変位によって篩にかけられるものの、その核心、すなわち本質的部分は不変のものであり、物語の精神によって人間と共に永遠に存続するものであることが判明した。つまり、その本質的部分は、宇宙のリズムと共鳴するものであって、最終的には「根源的リズム、すなわち神」へと収斂するものである。この意味において、やはり童話には「神のリズム」、すなわち「素朴な道徳」が本質的に宿っていると結論づけられる。

従って、研究課題に関する研究の結論は、次の通りである。

「1つの童話が異国に伝播される時、その本質的部分は不変のものであるが、その童話の文化的環境は、1. 宗教的要素,

2. 人物関係, 3. 解決手段, 4. 解決方法, 5. 登場人物の職業, 6. 謝礼・報酬, 7. 処罰の方法, 8. 果実の種類, 9. 社会制度, 10. 文化の成熟度, 11. 性の開放度, 12. 良心に基づく勧善懲悪の精神, の点において異国の伝統文化・習慣へと置き換えられる。」

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 19 件)

- ① 梅内幸信, 『はてしない物語』におけるファンタジーの機能, 査読無, 『日本独文学会研究叢書』64号, (『エンデ文学におけるファンタジー』梅内幸信編), 2009年, 14-24 ページ。
- ② 梅内幸信, M. エンデの『はてしない物語』に見られる振動医学的効果について, 査読有, 鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』70号, 2009年, 137-156 ページ。
- ③ 梅内幸信, グリム童話におけるアメリカの文化的変位——白雪姫になれなかったマリリン——, 査読無, 『VERBA』33号, 2009年, 29-98 ページ。
- ④ 梅内幸信, 『イバラ姫』(KHM50)に見られる文化的変位について, 査読無, 鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』68号, 2008年, 99-110 ページ。
- ⑤ 梅内幸信, Über die fantastische Literatur in der modernen Kultur, [現代文化におけるファンタジー文学について], 査読無, Asiatische Germanistentagung 2006 Seoul: Kulturwissenschaftliche Germanistik in Asien (第5回アジア地区ゲルマニスト会議), EURO Trading & Publishing Co. (韓国), 3号, 2008年, 329-337 ページ。
- ⑥ 梅内幸信, 『手なし娘』(KHM31)に見られる文化的変位, 査読有, 『西日本ドイツ文学』19号, 2007年, 1-15 ページ。
- ⑦ 梅内幸信 <「いばら姫」百年の眠り——心理学的解釈の観点から——>, 査読無, 日本独文学会研究叢書, 50号, 2007年, 39-46 ページ。
- ⑧ 梅内幸信, M. エンデの『モモ』に見られるファンタジーの役割, 査読有, 『ヘルダー研究』12号, 2006年, 105-121 ページ。

[学会発表] (計 5 件)

- ① 梅内幸信, 『はてしない物語』におけるファンタジーの機能について, 日本独文学会 2008 年度秋季研究発表会 (岡山大学), シンポジウムⅢ「エンデ文学におけるファンタジー (Phantasie in der Dichtung von Michael Ende)」, 2008 年 10 月。
- ② UMENAI Yukinobu, Über den Kannibalismus im Märchen „Dornröschen“ (『イバラ姫』に見られるカニバリズムについて), Asiatische Germanistentagung 2008 Kanazawa (アジア・ゲルマニスト会議 2008 金澤; 金澤星陵大学), 2008 年 5 月。
- ③ 梅内幸信, 進歩を進化に連動させるファンタジーの智恵——ホフマンとグリム兄弟, そしてエンデ——, 「日本ヘルダー学会」春季研究発表会 (立教大学) シンポジウム「進歩・進化の思想——十八世紀から現代へ——」, 2007 年 5 月。
- ④ 梅内幸信, 「いばら姫」百年の眠り——心理学的解釈の観点から——, シンポジウムⅡ「グリム・メルヒェン研究——その多様なアプローチ——」(Erforschung der Grimmschen Märchen - Verschiedene Zugänge-), 日本独文学会 2006 年度秋季研究発表会 (九州産業大学), 2006 年 10 月。
- ⑤ UMENAI Yukinobu, Über die fantastische Literatur in der modernen Kultur (現代文化におけるファンタジー文学について), Asiatische Germanistentagung Seoul 2006 (第5回アジア地区ゲルマニスト会議ソウル, 韓国; ソウル大学), 2006 年 8 月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅内 幸信 (UMENAI YUKINOBU)
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号: 00145450

(2) 研究分担者

(0)

研究者番号:

(3) 連携研究者

(0)

研究者番号: